

■ハイドン／交響曲第92番ト長調 Hob.I:92「オックスフォード」

ハイドンの作品の中で川瀬氏の「好きな曲ベスト3」に入るといふ第92番は、これまで以上にオーケストラから豊饒な響きを引き出した交響曲で、ベートーヴェンへと続くジャンルの可能性を広げた曲である。「オックスフォード」という愛称は、1791年、イギリスでのザロモンによるコンサートの成功に対して、オックスフォード大学から名誉音楽博士の称号が贈られることになり、それに対する謝意としてハイドンがオックスフォードへ赴いて指揮をした演奏会でこの曲を再演したことによる。その晴れの舞台にふさわしく、明朗で充実した内容をもっている。

自筆譜にフランスのドニイ伯爵の所蔵印があることから、もともと彼の依頼で1789年に作曲されたと考えられてきた。ただ、最初はエステルハージの楽団を念頭に作曲を完成し、のちにトランペットとティンパニを加えて、ロージュ・オランピックの演奏会で演奏したのではないとも言われる。アダージョの序奏で始まる第1楽章はソナタ形式。アレグロ・スピリトソの主部に入ると、第1ヴァイオリンが第1主題と第2主題を呈示する。展開部では第1主題を対位的に展開する。第2楽章アダージョ・カンタービレは3部形式。短調の激しい楽想の中間部を挟み、主部では抒情的なメロディが奏でられる。第3楽章アレグレットは明るく力強い主題をもつメヌエット。管楽器の扱いがうまい。第4楽章プレストはソナタ形式のフィナーレ。豊かな素材を操りながら転調を重ね、ときに対位的な展開を挟みながら、軽快に移ろっていく。やがて快活なコーダで終結する。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。